

## アウグスチヌス“De Baptismo, contra Donatistas”に表われた洗礼論上の諸問題について (6)

石橋 泰助

### 第十章 (第十三)

『しかし、彼ら〔ドナートゥス派〕は、「ドナートゥス派のうちでキリストの洗礼は〔信仰上の〕子供たちを生むか、生まないか」と非常に鋭く自問しているようである。もし、私たちが生むということに同意したならば、彼らは自派こそキリストの洗礼によって子供たちを生むことができる母なる教会なのであると主張するほどであり、教会は唯一のはずであるということから、私たちの〔教会〕はもはや教会ではないと非難するほどである。しかし、もし私たちが「生まない」と云ったならば、彼らは「それなら、われわれのもとで受洗した場合、もし彼らがまだ生まれていなかったとするなら、われわれのもとからあなたがたのもとへ移って行く人々は、なぜあなたがたのもとで洗礼によって生まれ代らないのか」と云うのである。』<sup>1)</sup>

### (第十四)

『だが、それはあたかも彼ら〔ドナートゥス派〕が〔教会に〕結ばれている点にもとづいて〔生むの〕ではなく、〔教会から〕切離されている点にもとづいて生むかのようなものである。けだし、彼らは〔教会の〕愛と平和の絆から切離されているが、ひとつの洗礼で結ばれているのである。それで、教会はひとつ、すなわちカトリックと呼ばれているものだけなのであり、〔教会が〕自分の一致から切離されているさまざまな人々の諸共

同体のうちに有している〔教会〕自身のものは何であれ、それら〔諸共同体〕のうちに自分のものを有していることによって、それらがではなく、まさに〔教会〕自身が生み出すのである。すなわち、それら〔諸共同体〕の分離が生み出すのではなく、教会のものの中から〔彼らが〕自分に保持しているものこそ〔生み出すのである〕。もし彼らがこれをも失なうならば、もはや決して生み出すことはないであろう。つまり、この教会が、すなわち自らの諸秘跡——そこから、このような事柄がどこであれ生じうるのである<sup>2)</sup>——が保持されているこの〔教会〕があらゆる場合に生み出すのである。たとえ〔教会の〕生むすべての人々が、世の終りまで堪忍ぶ人々を救うであろう〔教会との〕一致にまで達するのではないとしても。すなわち、分裂の明瞭な汚聖によって〔分離の〕はっきりしている人々だけがそれ〔一致〕に達しないばかりではなく、肉体的には教会の一致のうちに混合されていても、最悪の生活によって切離されている人々も〔教会の一致に達していないのである〕。たしかに〔教会〕自身が洗礼を通して魔術者シモンを生んだのであるが、彼には、キリストの遺産に何の分け前も持っていない、と云われたのである。<sup>3)</sup> 一体、彼には洗礼が欠けていたのだろうか、それとも諸秘跡が〔欠けていたのだろうか〕。だが、彼には愛が欠けていたから無駄に〔キリスト者として〕生まれたのであり、おそらく彼にとっては生まれぬ方がよかったのである。使徒〔パウロ〕が「私は、あなたがたにキリストにおける小児のように食物をではなく乳を飲むように与えました」<sup>4)</sup>と告げたその人々は一体〔キリスト者に〕生まれなかったのだろうか。<sup>5)</sup> しかし、彼〔使徒〕は彼らが肉的であったがゆえに飛込んでしまったその分裂の汚聖から彼らと呼戻してこう述べているのである。「私は、あなたがたにキリストにおける小児のように食物をではなく乳を飲むように与えました。なぜならあなたがたはまだ〔食べることが〕できなかったからです。しかしあなたがたは今なお〔食べることが〕できません。あなたがたはまだ肉的だからです。すなわちあなたがたの間に嫉妬や争いがあるので、あ

なたがたは肉的であり、人間に従って歩んでいるのではありませんか。すなわちある人が『私はパウロのものだ』と云い、他の人が『私はアポロのもの』と云っているので、あなたがたは人間〔的なもの〕ではありませんか。<sup>6)</sup> すなわち、彼〔使徒〕はこの人々について前の方でこう述べている。「兄弟たちよ、私は私たちの主イエズス・キリストのみ名によってあなたがたに切願します。あなたがたすべての人々が同じ事柄を話し、あなたがたの中に分裂がなく、同じ考え同じ意見のうちに完全となってください。なぜなら、わが兄弟たちよ、私はあなたがたについてクロエのもとに居る人々から、あなたがたの間に争いがあると知らされたからです。と云うのは、あなたがたは各々『私はパウロのものである』『いや、私はアポロのもの』『いや、私はケファのもの』『いや、私はキリストのもの』と云っていることです。キリストは分けられているのでしょうか。一体パウロがあなたがたのために十字架につけられたのでしょうか。あるいは、あなたがたはパウロの名で受洗したのでしょうか。<sup>7)</sup> したがって、もし彼ら〔ドナートゥス派〕がこの強情さと倒錯性のうちに居つづけるならば、彼らは確かに生まれてはいるのであろうが、そこから生まれた教会そのものには平和と一致の絆で所属することはないであろう。それゆえ、〔教会〕自身は、自分の母胎を通してであれ、侍女たちの母胎を通してであれ、あたかも自分の夫の種子からのように、同じ秘跡から生むのである。なぜなら使徒が、それらすべてのことはかたどりのうちに行われた、ということの意味なしに述べることはないからである。<sup>8)</sup> しかし、傲りたかぶり、かつ合法的な母に結ばれていない者たちはイスマエルと同じようであって、彼についてはこう云われている。「侍女とその息子を追い出してください。侍女の息子が私の子イサクと共に相続者であってはならないからです」。<sup>9)</sup> しかし、自分たちの父の正当な配偶者を平和に愛し、彼〔父〕の正当な権利によって (*legitimo iure*) 生まれた者たちは、侍女たちから生まれたとは云え、同じ遺産を得たヤコブの息子たちのようである。<sup>10)</sup> しかし、〔教会の〕中で一致して<sup>11)</sup> 母〔なる教

会] 自身の母胎から生まれ、受けた恩恵をなおざりにする者たちはイサクの子エサウと同じであって、神が「私はヤコブを愛したが、エサウに憎しみを持った」<sup>12)</sup>と証言し述べたことによって、二人ともひとつの性交によって受胎され同じ母胎から生まれたにもかかわらず、彼[エサウ]は排斥されたのである。<sup>13)</sup>』<sup>14)</sup>

本章は二つの節に分けられているが一括して取上げ、内容に従ってつぎのように区分して考察して行きたいと思う。1. ドナートゥス派がカトリック教会に提示する質問、<sup>15)</sup> 2. 上記質問に対する応答と反駁、<sup>16)</sup> 3. 反駁を支持する新約聖書の証言、<sup>17)</sup> 4. 反駁の要点を明示する旧約聖書の前例。

1. アウグスチヌスは前章に引続いて本章においてもドナートゥス派の見解とカトリックのそれとの根本的な相違点を追求して行く。アウグスチヌスはまず、ドナートゥス派の提する「ドナートゥス派のうちでキリストの洗礼は信仰上の子供たちを生むか、生まないか」、すなわち「ドナートゥス派の洗礼は有効か、無効か」という質問を取上げる。彼は、ドナートゥス派がこれを「自問しているようである (*videntur sibi quaerere*)」と間接的な言い方をしているが、文脈から明らかなようにドナートゥス派はこの質問を未解決の問題として論じているのではなく、カトリック側を攻撃する手段として使用しているのである。すなわち、カトリック側がもし「生む」と答えるなら、ドナートゥス派の洗礼を有効と認めたことになり、したがってドナートゥス派こそ「母なる教会 (*mater ecclesia*)」すなわち真の教会であり、真の教会が多数存在するはずはないから、カトリック教会は真の教会ではない、という結論を引き出すのである。また、もしカトリック側が「生まない」と答えるなら、ドナートゥス派の洗礼を無効としたわけであるから、ドナートゥス派からカトリック教会へ移った人々に有効な洗礼を授け直さなければならないはずであり、再洗礼を拒否するカトリック側の主張は明らかに矛盾したものとなる、という結論を引き出すのであ

る。こうして、ドナートゥス派がカトリック側の主張、すなわち「カトリック教会の外でも洗礼は与えられることができ、カトリック教会へ戻ってきて悔悛を通して回心した者には洗礼が繰返されることはない」<sup>18)</sup> という立場を完全に論破できたと考えているとアウグスチヌスは見なしているのである。ここに引用されたドナートゥス派の論法は「有効な洗礼は即救いを生ずる」という前提に立っている。しかし、アウグスチヌスはまさにこの前提そのものを問題とするのであり、以下の駁論において彼は洗礼の有効性 (validitas) と有益性 (utilitas) との識別という本書冒頭からの論点を別の側面から考察して行くのである。

2. アウグスチヌスは、ドナートゥス派の質問と攻撃に対して反駁するため、まず「生む (generare)」という洗礼の効果の象徴的表現に着目する。そして、生む主体、すなわち洗礼の効力をもたらす主体は何であるかを論じるのである。アウグスチヌスはここで、洗礼の秘跡が生む主体ではなく、カトリック教会こそ生む主体であると断言する。そして、ドナートゥス派の洗礼が有効なのは、洗礼が「教会自身のもの」だからであると説明する。すなわち、教会は分離した「諸共同体のうち自分のものを有していることによって、それら諸共同体がではなく、まさに教会自身が生み出す (per hoc quod suum in eis [communioneibus separatis] habet, ipsa [ecclesia] utique generat, non illae [communiones separatae].)」のである。したがって、諸分派の行なう洗礼そのものは、カトリック教会のものであって、カトリック教会が分派の行なう教会自身の洗礼を通して信仰上の子供を生み出すのである。つまり、分派自身がカトリック教会とは独立した洗礼を有し、独力で信仰上の子供を生み出すのではないということである。分派がカトリック教会の洗礼を保有するかぎりにおいてのみ彼らの行なう洗礼は有効なのであって、「もし彼らがこれ[カトリック教会の洗礼]をも失うならば、もはや決して生み出すことはないであろう (quodsi et hoc dimittant, omnino non generant.)」。

アウグスチヌスは、以上の論述によって、本書第一章第二節以下に論じてきた洗礼の有効性と有益性の区別およびその根拠に一つの新しい観点を加えている。第九章までは、ドナトゥス派の洗礼もカトリック教会の洗礼も有効であるから、ドナトゥス派の行なっている再洗礼は不正であること、およびドナトゥス派はたとえ有効な洗礼を有していても分裂という背教以上に兇悪な「愛と平和の絆」の破壊行動をとっているゆえに、まさに洗礼の目的そのものである「キリストとの一致」から切離されてしまっている、という観点が詳細に論じられてきた。本章においては、洗礼の秘跡が本来どこに属するものであるか、換言すれば洗礼の秘跡の効力はどこから由来するか、という観点が論じられている。アウグスチヌスはこの観点をより明確に示すために、洗礼の秘跡によって信仰上の子供として生まれても、実際に救いをもたらす教会との一致に達しない二つの例を上げる。すなわち、「分裂の明瞭な汚聖によって分離のはっきりしている人々 (*qui separationis aperto sacrilegio manifesti sunt*)」と「肉体的には教会の一致のうちに混合されていても、最悪の生活によって切離されている人々 (*qui in eius [ecclesiae] unitate corporaliter mixti per vitam pessimam separantur*)」とである。洗礼の秘跡によって教会が生み出した人々の中には、後者のような人々も居ることは明らかであり、それでもこれらの人々は実際に信仰上生まれたのである。同様に、洗礼の秘跡を通して教会は前者のような人々をも実際に生み出す。いずれの場合にも、「自らの諸秘跡が保持されているこの教会が生み出す (*haec [ecclesia] itaque……generat, cujus sacramenta retinentur*)」のである。それゆえ、両者において洗礼は有効であり、逆に云えば、教会との一致の欠如は直ちに洗礼の有効性を損なう原因とはならない、というのがアウグスチヌスの主張である。

3. アウグスチヌスは、つぎに以上の論点を新約聖書の例と教えにもとづいて論証して行く。彼はまず使徒 8、9—24 に述べられた魔術者シモンの例を再び取上げる。「シモン自身も信じて洗礼を受け」(使徒 8、13)<sup>19)</sup> と

いう記述にもとづいて、アウグスチヌスは「教会自身が洗礼を通して魔術者シモンを生んだ (Simonem magum per baptismam ipsa [ecclesia] peperaret)」と述べている。そして、「おまえは、このことについては、どんな分け前もないし、それにあずかることもできない。おまえの心が神の前に正しくないからである。」(使徒 8、21) にもとづいて、「彼〔シモン〕には、キリストの遺産に何の分け前も持っていない、と云われたのである (cui tamen dictum est, quod non haberet partem in hereditate Christi.)」と述べている。その理由として、アウグスチヌスは、シモンには洗礼が欠けていたからでもなく、福音や諸秘跡が欠けていたからでもなく、「愛が欠けていたから (cui<sup>20)</sup> caritas deficit)」であると結論する。しかし、使徒行録の記述によれば、シモンが不義とされたのは、聖霊を授ける権威を金で得ようとしたからである。たしかに、すべての不義は根源的には愛の欠如に由来するものであるが、アウグスチヌスがこのシモンの例を説明ぬきで直ちに愛の欠如によるものと断じたのは、前述のように<sup>21)</sup> すでに愛を救いの究極的な決め手と論じた彼の「愛最優位説」とも云うべき考え方が強調されたためであろう。その結果、アウグスチヌスは、シモンが「無駄にキリスト者として生まれたのであり、おそらく彼にとっては生まれられない方がよかったのである (frustra natus est, et ei expediebat fortasse non nasci.)」とまで述べている。「無駄に (frustra)」<sup>22)</sup> は、前述の「無益に (inutiliter)」<sup>23)</sup> や「役に立たない (non valet)」<sup>24)</sup> と同じく、「洗礼による再生そのものが救いという実りを生じない」という意味で解されよう。ただし、使徒 8、22 は「だから、この悪を悔い、主に祈りなさい。そうすれば、心に抱いた思いが、あるいはゆるされるかもしれない」と記して、シモンに対する赦しの可能性と悔心の呼びかけを示しており、同 24 は「シモンは答えて『あなたがおっしゃったことが、何一つ、わたしの身にふりかからないように、わたしのために主に祈ってください』と云った。」と記述して、シモンが悔心し救われた可能性をも示しているのである。したがって、シモンは決して洗礼を無駄に受けたわけではないことになろう。

アウグスチヌスは、受洗後も洗礼の目的である教会との一致から離れて魂の滅びに至る人のあることを強調するため、あえてシモンを受洗後救いを失なった例として示し、彼が洗礼によって生まれたのは無駄であった、と断じたのであろう。

さらにアウグスチヌスは、シモンが生まれぬ方がよかった、とさえ述べる。本句の「生まれる (*nasci*)」は自然的出生の意味で解することもできよう。<sup>25)</sup> 自然的出生の意味で解するならば、アウグスチヌスは、シモンの誕生そのものが無駄なもの、いやむしろ悪いものと考えていることになる。アウグスチヌスにとって、救いに至らない生命はない方がよい存在と見なすべきものなのであろう。本句を信仰上の誕生の意味で解する場合は、前句の「無駄に生まれた」という表現を一層強調するものとして解釈できる。いづれにしろ、本句の背後には、マタイ 26、24“*bonum erat ei, si natus non fuisset homo ille* (その人はむしろ生まれなかった方がよかったですであろうに)”、あるいは、マルコ 14、21“*bonum erat ei, si non esset natus homo ille*(その人はむしろ、生まれなかった方がよかったですであろうに)”が想定されていると考えるべきであろう。

つぎに、アウグスチヌスは、1コリント 3、1-4および1コリント 1、10-13を引用し、分派における受洗の無益さを使徒の権威によって証明しようとする。彼は、パウロが1コリント 1、10-13でコリントの教会に分裂の事実があることを述べている、と解釈し、1コリント 3、1-4でパウロがこれら分裂をもたらした人々を教会に属さないものと見なしている、と解釈しているようである。なぜなら、アウグスチヌスが1コリント 3、1・2に述べられた「あなたがた」をドナトゥス派と同じ状況にある者、すなわち洗礼は受けているが分派の中で受けたのであり、分裂のうちにあるかぎり「そこから生まれた教会そのものには平和と一致の絆で所属することはないであろう (*nec tamen ad ipsam ecclesiam de qua nati erant, per pacis atque unitatis vinculum pertinerent.*)」人々の聖書的前例と見なしていることは明らかだからである。しかし、彼のこのような



解釈は当を得たものであろうか。1コリント1、10-13で分裂の事実が述べられていることについては異論はないであろう。しかし、1コリント3、1-4で述べられていることは、パウロがこれら分裂をもたらした人々を断罪し排斥しているのではなく、むしろそのような未熟な状態を早く脱して、すべての人を用いて働かれる神御自身における一致へと成長すべく勧告しているのである。すなわち、ここで呼びかけられた「あなたがた」はコリント教会の全信徒を指しており、パウロは彼らが未熟な信仰にとどまって信仰のない肉的に生きる人間のように争い合っていることを憂慮し叱責しかつ矯正しようとしているのである。<sup>26)</sup> したがって、コリント教会の信徒たちをドナートゥス派の人々とそのまま対比し同列に論じることは本書の主旨からしてあまり妥当とは云えず、アウグスチヌスが使徒の権威をもってドナートゥス派の倒錯性を論証しようとしたこの引用は、十分その目的を達したとは云い難いと云わなければならないであろう。アウグスチヌスは、初代教会における分裂の事実に着目し、その要旨を直接ドナートゥス派に当てはめようとした結果、1コリント3、1-4におけるパウロの主旨を十分考察することなしに引用したと云えるのではないであろうか。<sup>27)</sup>

4. アウグスチヌスは、さらに上記の観点を旧約聖書の出来事にもとづいて解説する。すなわち、教会から離れた分派の中で洗礼を行ないかつ教会に反抗し続ける者たち、分派の中で受洗したが教会に従う者たち、および教会で受洗しながら愛の欠如のために救いに達しない者たちをそれぞれイスマエル、ラケルの侍女ビルハの息子たち、およびエサウにたとえて説明している。このたとえの中でアウグスチヌスは、キリストを夫、教会をその正当な妻、分派を妻の侍女になぞらえている。また彼は、このような旧約聖書の適用を使徒の権威によって正当化しているが、このような予型論 (typology) が教父時代には極めて通例であったとは云え、その適用の適否はやはりその内容の整合性に依拠するものであることは言うまでもな

いであろう。

さて、旧約の予型としてアウグスチヌスが最初に上げるのはイスマエルの例である。<sup>29)</sup> アブラハムの妻サラは長い間子供に恵まれなかったので、自分の侍女（奴隷）ハガルをアブラハムに差し出してイスマエルを産ませたが、後に自分の子イサクが生まれるとイサクを相続人とし、イスマエルを母ハガルと共に追い出させた。アウグスチヌスは「侍女の子が私の子イサクと共に相続者であってはならない」（創世 21、10）というサラのことに注目し、正当な妻サラとその子イサクを教会とその受洗者になぞらえ、侍女ハガルとその子イスマエルを「傲りたかぶり、かつ合法的な母に結ばれていない者たち（*qui superbiunt et legitimae matri non adiunguntur*）」、すなわち分派とその受洗者になぞらえる。イサクもイスマエルも同じ父アブラハムから出たのであるが、アブラハムの正妻サラの母胎から生まれたイサクは相続人となり、侍女ハガルの母胎から生まれたイスマエルは母と共に追放された。このように、教会における受洗者も分派における受洗者も共にキリストの生命に生まれるが、前者はキリストの国を継ぎ、後者はキリストの国から追放される、という点に比喻を見ているのである。

つぎにアウグスチヌスが取上げる旧約の予型は、侍女から生まれたヤコブの子ら、すなわちダン、ナフタリ、ガド、アシェルである。<sup>29)</sup> ヤコブはレアとラケルの姉妹を妻とした。レアには六人の男子が生まれたがラケルには子が生まれなかったため、その侍女（奴隷）ビルハによって二人の男子を得、レアもその侍女ジルバによってさらに二人の男子を得た。後にラケルには二人の男子が生まれたが、これらすべての子は対等の相続権を持つ者として扱われた。「自分たちの父の正当な配偶者を平和に愛し、父の正当な権利によって生まれた者たち（*qui pacifice diligunt legitimam patris sui coniugem, cuius legitimo iure generati sunt*）」とアウグスチヌスが述べている人々とは、キリストの正当な配偶者である教会を平和に愛し、キリストの正当な権利すなわち洗礼の秘跡によって生まれた者たちであって、「侍女たちから生まれた（*de ancillis natis*）」人々すなわち分派におい

て受洗した人々のことである。この人々は分派で受洗しても、「同じ遺産を得たヤコブの息子たちのように (*similes sunt filiis Iacob, ……eandem hereditatem sumentibus*)」キリストの国の相続者となるのである。アウグスチヌスは、このように同じ分派の中で受洗し、同じキリストから生まれても、キリストの正当な配偶者である教会に対するその後の態度および関係によってキリストの国の相続人になれる場合と、なれない場合があることを示しているのである。

最後にアウグスチヌスは旧約の予型としてエサウの例を上げる。<sup>30)</sup> イサクの妻リベカはエサウとヤコブの双子を生んだ。イサクはエサウをより愛したが、ヤコブを愛するリベカの策略によってヤコブはエサウから長子権を、また父イサクから相続の祝福を獲得した。神はヤコブを祝福し、子孫を増やしかつ強大にした。アウグスチヌスは、エサウがヤコブと同じ父母から生まれながら神から祝福されず、むしろマラキヤ書のことばにもとづいて、神から憎まれ排斥された者となったことに着目し、教会で受洗しながら「受けた恩恵をなおざりにする者たち (*qui……neglegunt gratiam quam acceperunt*)」をエサウになぞらえる。すなわち、母なる教会で受洗しキリストの生命に生まれながら受けた恩恵をなおざりにし、愛を失って悪に陥る者たちは神から憎まれ排斥され、キリストの国を継ぐことができないというのである。

アウグスチヌスは以上のように、旧約の太祖たちの親子関係を洗礼論に援用することによって、洗礼と救済の関係についての自分の理論をより明白に表現しようとしたものと解することができよう。すなわち、洗礼を通して受けるのはキリストにおける信仰の生命であるが、この生命がキリストの国を相続するに価するものとなるには母なる教会との一致が不可欠である、という見解である。彼によれば、人は洗礼によって救われるのであるが、無条件に救われるのではなく、受けた洗礼にふさわしく生き通すことが条件となる。本来洗礼はキリストとの一致を通して教会（信仰者の共同体）を生み出す源泉なのであるから、洗礼を受けることは教会の一員と

なることなのである。それゆえ、分派における洗礼、すなわち洗礼を受けて分派の一員となる（教会から分離する）ということは矛盾である。したがって、ドナートゥス派は、彼らの洗礼が有効であるから（それは、ドナートゥス派からカトリック教会へ移った人をカトリック教会が再洗礼を行なわないという事実から、カトリック側もドナートゥス派の洗礼を有効と認めていることが確認される）、その受洗者はみな正当な教会の一員であり、それゆえドナートゥス派こそ正当な教会そのものにほかならないと主張する。それに対してアウグスチヌスは、洗礼を受けて教会の一員となるという次元と、教会に一致して生き続けるという次元との間に区別を認め、洗礼を受けたにもかかわらず教会に一致していない二つの例を示す。すなわち、分派で受洗しかつ分派にとどまり続ける場合と、教会で受洗したにもかかわらず愛を喪失することによって教会から切離されてしまう場合とである。すでに本書第二章において<sup>31)</sup> アウグスチヌスは洗礼の秘跡の有効性と有益性を区別することによって洗礼と救霊との関係についての彼の主張の本質的な面に触れたのであるが、本章ではさらに洗礼の有益性の諸条件を明らかにしている。すなわちアウグスチヌスは、救霊が愛にもとづく平和と一致の絆による教会所属を条件として成立するものであると見ており、洗礼をこの条件のための必要手段と見ているのである。すなわち、洗礼は教会所属のための必要手段であるが、救霊は直接洗礼にはなく、実質的な教会所属に依拠している、と考えられている。このように、アウグスチヌスは救済論における教会の意味を非常に重要視しており、教会を秘跡の目的が実現される場として位置づけている。このような見地からするならば、分派の中で受洗するということは、一体受洗者にどのような状態をもたらすことになるのであろうか。この点について、彼は後により詳細な考察を試みるのである。<sup>32)</sup>

## 第十一章（第十五）

『また彼ら〔ドナートゥス派〕は「ドナートゥス派での洗礼によって

罪が赦されるかどうか」と尋ね、もし私たちが赦されると云ったならば、彼らはこう答えようとしている。「それなら、そこ〔ドナトゥス派〕には聖霊がある。なぜなら、主が息を吹きかけて〔聖霊が〕弟子たちに与えられたとき、〔主は〕続けて『父と子と聖霊の名において国々の人々を授洗しなさい。』<sup>33)</sup> あなたがたがもし誰かに罪を赦すならば、彼には〔罪が〕赦されるであろうし、もし誰かに〔罪を〕残すならば、〔その人には罪が〕残されるであろう。』<sup>34)</sup> と云われたのだから。」そして彼らはこう云うのである。「もしそうであるならば、われわれの共同体はキリストの教会である。なぜなら、教会以外では聖霊は罪の赦しをなし給わないからである。そしてもしわれわれの共同体がキリストの共同体であるなら、あなたがたの共同体はキリストの教会ではない。なぜなら、『私の鳩は一羽、その母のひとり〔子〕だ』<sup>35)</sup> と云われているのは、どちらであろうとも、ひとつだけであり、分派の数だけ教会が沢山あることはできないからである。」しかし、もし私たちが、そこ〔ドナトゥス派〕では罪が赦されない、と云ったならば、彼らは「それなら、そこには真の洗礼がないのであり、したがってわれわれから〔洗礼を〕受けた人たちをあなたがたは授洗しなければならない。あなたがたがそうしないのだから、あなたがたはキリストの教会の中に居ない、ということ容認しているのである。」と云う。』<sup>36)</sup>

(第十六)

『これらの事に対して、私たちは聖書にもとづき、彼らが私たちに尋ねたことを自分で自分に答えるように彼らに尋ねる仕方で反駁しよう。すなわち私は、愛がないところで罪が赦されるかどうか云いなさい、と尋ねる。なぜなら、罪は魂の暗闇であり、私たちはヨハネが「兄弟を憎む者は今もなお暗闇の中に居る」<sup>37)</sup> と述べているのを聞いているからである。けだし、もし兄弟憎悪 (odium fraternum) によって盲目とされていなければ、誰も分派を作ることにはしないであろう。したがって、も

し私たちが、そこ〔ドナートゥス派〕では罪が赦されない、と云っているなら、彼らのもとの受洗した人はどのように生まれ代るのであろうか。洗礼によって生まれ代るということは、古いものから新しくされるということにほかならないのではないか。だが、以前の罪が赦されていない人は、どのように古いものから新しくされるのであろうか。もし生まれ代らなかったとするなら、彼はキリストを着ていないのであり、そこから彼はもう一度受洗すべきであると思われる、と結論されよう。なぜなら、使徒〔パウロ〕は「キリストのうちに受洗したあなたがたはみなキリストを着ているのです」<sup>38)</sup>と述べているからである。もし彼〔キリスト〕を着ていないなら、キリストのうちに受洗したと見なされるべきではないのである。ところが私たちは、〔彼が〕キリストのうちに受洗した、と云っているのであるから、彼がキリストを着たことを容認しているのであり、もしこのことを容認しているならば、〔彼が〕生まれ代ったことをも容認しているのである。もしそうならば、罪も赦されたのである。さて、もし罪の赦しがすでに行われているならば、どうしてヨハネは「自分の兄弟を憎む者は今もなお暗闇にとどまっている」<sup>39)</sup>と述べているのであろうか。分裂の中には兄弟憎悪がないのであろうか。分裂の起源と固執は兄弟に対する憎悪以外の何ものでもないのに誰がそんなことを云えようか。』<sup>40)</sup>

(第十七)

『彼ら〔ドナートゥス派〕は「それゆえ分派の中には罪の赦しはなく、したがって新しい人間の生まれ代りもなく、そのためにキリストの洗礼もない」と述べているので、自分でこの問題を解決しているように思われる。しかし、私たちはそこ〔分派〕にもキリストの洗礼があると容認しているので、あの魔術者シモンがキリストの真の洗礼によって浸されたのかどうか、という問題を解くよう彼ら〔ドナートゥス派〕に提起する。彼らは、聖書の権威に強制されるから、「はい」と答えるであろう。

それで〔さらに〕私は、彼〔シモン〕には罪が赦された、と彼らが容認するかどうか尋ねる。たしかに彼らは容認するであろう。さらに私は、なぜペトロが彼〔シモン〕に聖人たちの分け前に与らない、と云ったのかを尋ねる。<sup>41)</sup>「なぜなら、彼〔シモン〕は使徒たちが神の賜物の商人であると信じ、それを金で買おうと欲して〔洗礼の〕あとで罪を犯したからである」と彼ら〔ドナートゥス派〕は答えるであろう。』<sup>42)</sup>

本章も三つの節から成り立っているが、一括して考察することとする。本章は、大きく二つの部分に分けることができる。すなわち、1. ドナートゥス派には罪の赦しが存するかどうか、というドナートゥス派からの問題提起、<sup>43)</sup> および、2. 愛がないところに罪の赦しが存するかどうか、というアウグスチヌスからの反駁的問題提起である。<sup>44)</sup> 以下この区分に従って内容を詳しく見て行きたいと思う。

1. 前章では、ドナートゥス派の洗礼の有効性の問題が信仰上の誕生の有無という観点から論じられたが、本章では同じ問題が罪の赦しの有無という観点から論じられる。アウグスチヌスは、まずドナートゥス派の提起する「ドナートゥス派の洗礼によって罪が赦されるかどうか」という質問を取上げる。この質問も内容的にはカトリック側に対する攻撃の手段として用いられていると見ることができよう。すなわち、もしカトリック側が「赦される」と答えるならば、ドナートゥス派は「罪の赦しは聖霊によるのであるから、ドナートゥス派には聖霊が存し、聖霊の存するところキリストの共同体すなわち真の教会が存する。真の教会は唯一のはずであるからドナートゥス派こそ真の教会であり、したがってカトリックは真の教会ではない」と結論する。しかし、もしカトリック側が「赦されない」と答えるならば、ドナートゥス派は「ドナートゥス派の洗礼は無効であったことになり、したがってカトリック側はドナートゥス派から移って来る人に再授洗しなければならぬはずである。しかるに、カトリック側は彼らを再

授洗しないので、カトリック教会は真の受洗者によって構成されるキリストの教会ではないことを認めたことになる」と結論する。こうしてアウグスチヌスは、ドナートゥス派が分派受洗者の再授洗を否定するカトリック教会の立場を論破できたと考えている、とみなしているのである。このドナートゥス派の論拠は、洗礼、罪の赦し、聖霊の働き、キリストの共同体、真の教会、救霊がすべて同時かつ同一の出来事である、という前提に立っていることは明らかである。アウグスチヌスは前章同様、この前提そのものを批判することによってドナートゥス派の理論に反駁を加え、さらに洗礼と救済との間に内在するより精妙かつ深奥な関係について鋭い洞察を展開して行くのである。

2. アウグスチヌスは、ドナートゥス派側からの以上の攻撃的質問に対して、「愛がないところで罪が赦されるかどうか」と云う質問を投げ返すことによって、彼らの論拠そのものに欠陥があることを示そうとする。ここでアウグスチヌスは、この主題をかなり複雑な論理構成で記述している。この主題は三つの章にまたがって扱われているが、本章では問題のより詳しい吟味のみが述べられ、質問に対する解答とそれにもとづくドナートゥス派論駁とは次章以下で述べられることになる。さて、本章第十六節および第十七節の内容は三つに区分される。すなわち、(1)「愛がないところで罪が赦されるかどうか」という問題の提起と、この質問についての補足的な説明、<sup>45)</sup> (2)「ドナートゥス派では罪が赦されるかどうか」という前節の質問に対する「赦される」というカトリック側の見解の確認、<sup>46)</sup> (3)「ドナートゥス派で罪が赦されるなら、なぜヨハネは『兄弟を憎む者はなお暗闇の中にとどまっている』と述べるのか」という問題の提起と、それに対するドナートゥス派側の解答、およびその解答に対する反論としての質問の再提起<sup>47)</sup> である。以下順次この内容を考察することとする。

(1)アウグスチヌスは前節に述べられたドナートゥス派からの攻撃的質問に反駁するため、「愛のないところで罪が赦されるかどうか」という質問を



逆に提起するが、この質問はやや唐突な印象を免れない。すなわち、「愛のないところ」というのは何を指しているかについて予備的な説明がまだ行われていないので、前節までの内容との論理的一貫性が判然としていないのである。しかし、論を進めるに従って、しだいにこの質問の真の意図が明瞭となり、ドナートゥス派論駁のための緻密な論理的布石としての効果を発揮して行くのである。さて、この質問に続いて「愛のないところ (*ubi caritas non est*)」とは何であるかの説明が行われる。すなわち、アウグスチヌスはこれを分派、つまりカトリック側から見てドナートゥス派と見なしているのである。なぜなら、彼の説明によれば、分派を作る者はみな「兄弟憎悪によって盲目とされている (*fraterno odio excaecarentur*)」のであって、ヨハネが「兄弟を憎む者は暗闇の中に居る」(1ヨハネ2、9)と述べているように、魂の暗闇すなわち罪の中に居るからである。アウグスチヌスはこれを逆の順序で説明しているが、その大筋は「罪——魂の暗闇——『兄弟を憎む者は暗闇の中に居る』——兄弟憎悪による盲目——分派」という関連に成り立っている。したがって、ここでアウグスチヌスが述べていることだけでもとづいて考えるならば、「愛のないところ、すなわち分派において罪が赦されるかどうか」という質問に対しては「赦されない」という答しかないように思われる。そうすると前節の「ドナートゥス派での洗礼によって罪が赦されるかどうか」という質問に対しても、「赦されない」と答えざるを得なくなり、カトリック側の再洗礼不要論の根拠が崩れることになってしまう。しかし、アウグスチヌス自身はそのようには解答しない。

ここで「罪は魂の暗闇である (*peccata tenebrae animarum sunt*)」という記述が見られるが、これはここで引用された1ヨハネ2、9以下ばかりでなく、マタイ6、22以下および並行箇所、ヨハネ全体などに見られる、光と闇との対比を神と神に反することすなわち罪との対比として描写する聖書的表現にもとづいていることは確かである。しかし同時に、またこれはアウグスチヌス個人の体験にもとづいた確信でもあると云えよう。<sup>48)</sup>

(2)さて、アウグスチヌスは分派行動そのものを罪と断じながら、「ドナートゥス派での洗礼は罪の赦しを生ずるかどうか」という質問に対して、「赦される」という結論を出しているのである。その理由は、すでに前章で論じられた通り、アウグスチヌスがドナートゥス派の洗礼を信仰上の誕生をもたらすもの、すなわち有効なものを見なしていることにある。洗礼が有効であるということは、洗礼の直接の結果である「キリストを着ること、新しく生まれ代ること、罪が赦されること」が生じることを意味する。アウグスチヌスはこのことを説明しながら、カトリックの立場が再洗礼否定であり、そこから必然的にドナートゥス派の洗礼によって罪が赦されることを容認しなければならないことを明らかにしている。

ここでアウグスチヌスが用いている論法は、カトリック側の読者を予想に反した結論へと導き、そこからその背後にある問題、すなわちアウグスチヌスが真に主張したい事柄へと目を転じさせるという方式をとっている。なぜなら、「ドナートゥス派の洗礼は罪の赦しをもたらす」と結論することは、まさにドナートゥス派の主張の正当性を認めることにほかならない。したがってこの時点においては、アウグスチヌスがドナートゥス派を論駁するために提起した「愛のないところで罪が赦されるかどうか」という問題は「愛がないところ（すなわち分派）においても罪は赦される」という結論を引き出したことになり、反駁の効果を全く上げていないのである。しかし、アウグスチヌスはまさにこの結論をより深い問題への出発点とするのである。

(3)アウグスチヌスはさらにつぎのように論を進めて行く。「さて、もし罪の赦しが〔分派の中で〕すでに行われているならば、どうしてヨハネは『自分の兄弟を憎む者は今もお暗闇の中にとどまっている』と述べているのであろうか。」(1)の項で結論した通り、分派が兄弟憎悪の所産であり継続的な罪の状況そのものであるならば、分派における罪の赦しとは一体何であらうか。アウグスチヌスは、一応分派は兄弟憎悪と無関係に生ずるものかどうかと問い直したあとで、「分裂の起源と固執は兄弟に対する憎悪以

外の何ものでもない (et origo et pertinacia schismatis nulla sit alia, nisi odium fratris)」と断言する。そして彼は自分の解答を保留したまま、ドナトゥス派の立場に立った場合の解答を述べる。すなわち、ドナトゥス派は、自派以外の洗礼は無効である、と主張しているから、自派以外には罪の赦しも新しい人間の生まれ代りもキリストの洗礼もない、という立場に立っていることになる。この立場からするなら、上記の問題の解答はしごく簡単である。すなわち、そこからは「愛のないところ (すなわち分派) には罪の赦しはない」という解答しか出て来ないのである。しかしアウグスチヌスはこのような解答に対して再び魔術者シモンの例を上げながら批判を加えて行くのである。

アウグスチヌスはここで、ドナトゥス派に対して三つの質問を提し、ドナトゥス派がそれに答えるという論法を用いて筆を進めて行く。もちろん、ドナトゥス派自身がこのように答えるかどうかは別問題であり、おそらく彼らはこのような問題提起の仕方そのものを否定し解答を拒否するものと考えられよう。しかし、アウグスチヌスはドナトゥス派が聖書のことばを文字通り信じ受け入れざるを得ない、ということを手がかりとして論を進めて行くのである。三つの質問とそれに対する解答の内容はつぎの通りである。

① 魔術者シモンは真の洗礼を受けたかどうか。

「シモン自身も信じて洗礼を受け」(使徒 8、13) という記事があるので、シモンが洗礼を受けたことを否定することはできない。また、このシモンの洗礼が無効であったということを証明することも不可能である。したがって、聖書のテキストにもとづくかぎり「シモンは真の洗礼を受けた」と答えざるを得ないことは明らかである。

② シモンは罪が赦されたかどうか。

この質問に対する聖書の直接の記事はない。しかし、シモンが真の洗礼を受けたことがすでに肯定され、また聖書にもとづいて洗礼が「罪の赦しを受けるため」(使徒 2、38)のものであることも明らか以上、シモンが

洗礼を受けたときに罪の赦しを受けたことを認めざるを得ないであろう。

③ なぜペトロはシモンに対して、聖人たちの分け前に与からない、と云ったのか。

聖書には、ペトロがシモンに対して「おまえは、このことについては、どんな分け前もないし、それに与かることもできない(οὐκ ἔστιν σοι μερίς οὐδὲ κληρος ἐν τῷ λόγῳ τούτῳ)。」と述べたと記されている(使徒8、21)。<sup>49)</sup> 聖書本文には「聖人たちの分け前」ということばはない。「このこと」と訳されている ὁ λόγος οὗτος は何を意味しているのであろうか。キッテル(G. Kittel)によれば、ここで用いられた ὁ λόγος は「(論じられた)事柄」「話の主題」という通常の古典ギリシャ語の意味で用いられており、οὗτος は8、4および8、14の λόγος ではないことを示しているのである。したがって、本箇所での ὁ λόγος は8、19で、シモンが金で聖霊授与の権を得ようとした事柄、を指すと考えられる。<sup>50)</sup> それゆえ、聖書本文の直接の意味は、「おまえは聖霊授与の権には何の分け前も配当も持っていない」ということになる。<sup>51)</sup> アウグスチヌスは、この分け前を「聖人たちの分け前(sors sanctorum)」および「キリストの遺産の分け前(pars in hereditate Christi)」<sup>52)</sup> と解釈し、シモンが聖人たちと共にキリストの国を継ぐことができないこと、すなわち救いに与かることができないこと、の意味で理解した。たしかに聖霊授与の権もまた聖霊のたまものであるから、聖書は間接的にシモンが聖霊の賜物に無縁な者であること、すなわち救いに与かることができないことを示している、と考えることはあながち無理な解釈とは云えないかもしれない。とくにアウグスチヌスの時代に、聖書のこの箇所が彼の述べたような意味で一般に理解されていたとすれば、彼の質問とそれに対する答えは読者に対して十分な説得力を有したと云えるであろう。

さて、アウグスチヌスは、ペトロがシモンに向かって述べたことばを「シモンは救いに与かっていない」という意味で理解したことは明らかである。それゆえ、③の質問は「なぜペトロはシモンに対して、おまえは救いに与か

らない、と云ったのか」という意味で述べられたことになる。アウグスチヌスは、ドナトゥス派が聖書にもとづいて答えるべき解答として「なぜなら、シモンは使徒たちが神の賜物の商人であると信じ、それを金で買おうと欲して、洗礼のあとで罪を犯したからである」と述べている。シモンが分け前に与かれないと云われた理由を聖書の記事にしたがってまとめるならば、「おまえは金で神の賜物を買おうと思っている。」「おまえの心は神の前に正しくない。」「おまえは悪意に満ち、不義のきずなしにばられている。」(使徒 8、20・21・23) というテキストが上げられるであろう。この聖書本文の意味が厳密にアウグスチヌスの述べた意味で解釈できるかどうかは簡単に結論はできない。<sup>53)</sup> ただ、アウグスチヌスの意図が厳密な聖書解釈にあるのではないことは明らかである。むしろ魔術者シモンの例を取上げながら、聖書の中にも真の洗礼を受け罪の赦しを受けながら救いに与かることができない人がある、ということを読者に納得させるのが主眼となっているのである。

アウグスチヌスは、次章でさらにシモンの例をもととして問題の本質に迫って行く。本章はまだそのための導入的役割を果しているにすぎない。したがって、本章で論じられている洗礼論上の諸問題は、この主題が一段落する次章以下で一括して考察するのが妥当であろう。

## 注

- 1) “De Baptismo, contra Donatistas” lib, 1, cap, 10, n. 13 (AOO 9, 1, 168).
- 2) AOOのテキストは“unde possit tale aliquid ubicumque generari”となっており、CSELのテキストも一致していて他の読み方は示されていない。NPNFの英語では、「そこ〔諸秘跡〕からいかなるこのような誕生もどんな場合であっても生じることができる (from which any such birth can alone in any case proceed)」としており、tale aliquidを any such birthの意味で解釈している。(J. R. King, NPNF vol. 4, p. 418)
- 3) Cf. Act 8, 13:21.

- 4) 1 Cor 3, 1 : 2.
- 5) NPNF の英訳では“Was anything wanting to their birth to whom the apostle says, …… (使徒が……と云いわたすその人々の誕生には何か欠けているのだろうか)”となっているが、AOO のテキストは“Numquid non erant nati quibus Apostolus dicit, ……”となっており、これは CSEL のテキストも一致している。CSEL は“non nasci fortasse”という別の読み方を上げているが、英訳の意味とはなり得ない。
- 6) 1 Cor 3, 1 - 4. 引用テキストはヴルガタ訳とほぼ一致している。
- 7) 1 Cor 1, 10-13. この引用テキストもヴルガタ訳とほぼ一致している。
- 8) この箇所の参照テキストとして、AOO も CSEL も 1 Cor 10, 11「以上の事は、前例として彼らに起こったのであり、世の終りの差迫っているわたしたちを戒めるために書き記されたのです」を上げているが、以上の事としてパウロが引用した例の中には以下にアウグスチヌスが引用する旧約の出来事は含まれていない。
- 9) Gen 21, 10. 引用テキストはヴルガタ訳とほぼ一致している。
- 10) Cf. Gen 30, 3 f.
- 11) 「[教会の] 中で一致して」の原文は、“*intus in unitate*”. NPNF の英訳は“*within the family* (家族の中で)”となっているが、文脈からみて *mater* は明らかに教会を意味しているので本文のように訳出した。
- 12) Mal 1, 2 : 3. 引用テキストはヴルガタ訳とほぼ一致している。
- 13) Cf. Gen 25, 21 f.
- 14) “*De Baptismo, contra Donatistas*” lib. I, cap. 10, n. 14 (AOO 9, 1, 168 f).
- 15) 第十三節。
- 16) 第十四節はじめより“……*per vitam pessimam separantur*, (……最悪の生活によって切離されている人々も [教会の一致に達しないのである。])”まで。
- 17) “……*per pacis atque unitatis vinculum pertinent*, (……平和と一致の絆で所属することはないのであろう。)”まで。
- 18) 本書第一章第二節。本論文(1)『南山神学』第 2 号、1979 年、9 頁参照。
- 19) 筆者の論述部分に引用した新約聖書の訳文は、原則としてフランシスコ会聖書研究所訳に従った。
- 20) CSEL のテキストでは *cui* の代りに *quia ei* となっており、*quia* および *cui* の異読があることを注で示している。いずれにしろ、文脈からみて意味上の変化はない。
- 21) 本書第九章第十二節。本論文(5)『南山神学』第 7 号、1984 年、40 頁以下参照。
- 22) *frustra* は *fraus* (欺瞞) と同じ語根から発生した副詞で *in deception* (欺いて)、*in error* (誤って)、*without effect* (結果なしに)、*to no purpose* (何の目的もなしに)、*without cause* (原因なしに)、*for nothing* (いたずらに)、*without reason* (理由なしに)、*uselessly* (無益に)、*in vain* (空しく) 等の意味を有する。cf. OLD 785 f.
- 23) 本書第一章第二節参照。

- 24) 本書第八章第十一節参照。
- 25) 本章では信仰上の出生を表わすのに *generare* が最も多く用いられ、*nasci* はむしろ自然的出生の意味で用いられている。しかし、第十三節の終り、“*cum apud nos fuerint baptizati, si nondum nati sunt*…… (われわれのもとで受洗した場合、もし彼らがまだ生まれていなかったとするなら、……)”は明らかに信仰上の出生を意味しており、また第十四節の後半で *generare* を自然的出生の意味で用いている箇所もあるので、厳密な使い分けがなされているわけではない。なお本章では、信仰上の出生を *renasci* (生まれ代る)、*parere* (生む) で表現している箇所が一回ずつある。
- 26) Cf. W. F. Orr ; J. A. Walther, *1 Corinthians*(The Anchor Bible), New York, 1976, p. 148-151 : 169-171. 松永晋一『パウロの手紙』「総説新約聖書」日本基督教団出版局、1981年、277頁以下。
- 27) ここでアウグスチヌスは *carnalis* という語に注目したとみることができるとはされない。*carnalis* はギリシャ語の *σαρκικός* の訳であり、*σαρκικός* は *σάρξ* に由来する。新約聖書、とくにパウロの書簡において、*σάρξ* は一般に罪の主体として述べられる場合が多い。したがってアウグスチヌスは、パウロがここで *carnalis* と呼んだ人々を救いに達しない人の意味で理解したかもしれない。ただし *1 Cor 3, 3* における *σαρκικός* は人間の罪の状況を強調しているのではなく、むしろ人間の本性そのものによって行動することを意味していると考えられる。Cf. ThDNT 7, 125-135.
- 28) Cf. *Gen 16, 1-16 : 21, 1-10*.
- 29) Cf. *Gen 30, 3-13*.
- 30) Cf. *Gen 25, 21-34 : 27, 1-28, 22*.
- 31) 本論文(2)『南山神学』第3号、1980年、1頁以下および7頁以下参照。
- 32) たとえば、本巻第十二章参照。
- 33) *Mt 28, 19*.
- 34) *Jn 20, 22 : 23*. 引用文はマタイとの合成であるため、かなり変形されている。
- 35) *Cant 6, 8*. 引用テキストは“*una est columba mea, una est matri suae*”であって、ヴルガタ訳テキスト“*Una est columba mea, perfecta mea, una est matris suae, electa genitrici suae.*”の抜萃形である。*matri suae* は「自分の母にとって(ひとり子)」の意味になるが、CSEL は *matris suae* の読み方があることを示しているので、聖書に合わせて「自分の母の(ひとり子)」と訳出した。
- 36) “*De Baptismo, contra Donatistas*”lib.1, cap. 11, n. 15 (AOO 9, 1, 169 f)
- 37) AOO も CSEL も引用箇所として *1 Jn 2, 11* を上げている。しかし、引用テキストは“*qui odit fratrem suum, in tenebris est usque adhuc.*”であって、聖書には *usque adhuc* に該当する語はない。*1 Jn 2, 9* が“*et fratrem suum odit, in tenebris est usque adhuc.*” (Vg) となっているので、この方が引用テキストに近い。両箇所の合成形と考えることもできよう。

- 38) Gal 3, 27. この引用テキストはヴルガタ訳とはほぼ一致している。
- 39) 上記注 37) と同じ。ただしここでは“in tenebris est”が“in tenebris manet”に変更されている。
- 40) “De Baptismo, contra Donatistas”lib. I, cap. 11, n. 16 (AOO 9, 1, 170).
- 41) Cf. Act 8, 21.
- 42) “De Baptismo, contra Donatistas”lib. I, cap. 11, n. 17 (AOO 9, 1, 170 f).
- 43) 第十五節。
- 44) 第十六節および第十七節。
- 45) 第十六節はじめより、“……si fraterno odio non excaecarentur, (……誰も分派を作ることはしないであろう。)”まで。
- 46) “……et peccata dimissa sunt, (……罪も赦されたのである。)”まで。
- 47) 以下第十六節の終りまでと、第十七節全部。
- 48) このような体験の描写はとくに Confessiones に多く見られる。Cf. Confessiones. I, 18, 28; 3, 1, 1; 7, 20, 26; 13, 2, 3; etc.
- 49) 訳文はフランシスコ会聖書研究所訳を引用した。日本聖書刊行会の新改訳は「あなたは、このことについて何の関係もないし、それにあずかることもできません。」と訳しており、「このこと」を「直訳『ことば』別訳『教え』」と注記している。
- 50) Cf. G. Kittel, “λέγω”D; ThDNT 4, 104.
- 51) *μερίς* は「部分」を原意とし、「割り当て、一群」等の意味を生じ、ここでは「分け前」の意味で解される。また *κλήρος* は「くじ」を原意とし、「配当、土地の一区画」等の意味を生じ、ここではやはり「分け前、配当」の意味で解される。Cf. Liddel; Scott, Greek-English Lexicon, Oxford, 1964; 玉川直重「新約聖書のギリシャ語辞典」キリスト新聞社、1978年。
- 52) 前章第十四節。
- 53) 前章 3. 参照。



CONCERNING PROBLEMS OF THE THEOLOGY OF  
BAPTISM FOUND IN ST. AUGUSTINE'S  
"DE BAPTISMO, CONTRA DONATISTAS" (6)

Taisuke ISHIBASHI

In this treatise, two chapters of Volume 1 of St. Augustin's "De Baptismo, contra Donatistas" that is, Chapter 10 (Number 13 and 14) and Chapter 11 (Number 15, 16 and 17), are treated.

Chapter 10 may be divided into four parts.

- (1) The Donatists ask Catholics whether the baptism of Christ in the party of Donatus bears children or not. Whichever the answer is, the Donatists draw the conclusion that they themselves are the only true Church of Christ.
- (2) Augustine brings forth the counterargument that the subject, which gives birth through baptism, is the Catholic Church, and that whoever baptizes, the sacrament itself always belongs to the Church.
- (3) Augustine adduces 1 Cor 3, 1-4 and 1, 10-13 from the Bible to prove his argument, and shows there is an example that even a baptized man is not united with the Church.
- (4) Moreover, Augustine sees a metaphor between the relation, which lies among Christ, Church, sect and baptized men, and the relation, which lies among husband, wife, handmaid and sons. Then, he takes up three episodes from the Old Testament: the episode of Ishmael; the episode of Bilhah, handmaid of Rachel, and her sons; and the episode of Esau. Using the metaphor and these episodes, he explains exactly three cases: one who is baptized in a sect and cannot enter the Kingdom of Christ; baptized in a sect but can enter the Kingdom of Christ; baptized in the Church but cannot enter the Kingdom of Christ.

In this Chapter, we can say that Augustine asserts the condition about the utility of the sacrament of baptism. For he shows that salvation is based on the condition of belonging to the Church by the bond of peace and unity, and

that baptism is a necessary means to bear that condition.

Chapter 11 may be divided into two parts.

(1) The Donatists ask Catholics whether sins are remitted in the baptism by the party of Donatus. Just as in the former question of Chapter 10, whichever the answer is, the Donatists derive the conclusion that they themselves are the only true Church of Christ.

(2) On the contrary, Augustine brings forth another question : whether there is any remission of sins where there is not charity. Then he concludes that, from the point of view of the Donatists, we must answer in the negative, but from the point of view of Catholics, we must answer in the positive. And he takes up the case of Simon Magus (Acts 8, 9-24) from the Bible to prove his conclusion, and shows there is an instance where even a baptized man cannot enter the Kingdom of God.

The argument of this chapter continues to the following chapter. Therefore we would like to sum up his assertion about the theology of baptism of this chapter in the following chapter.